ISSN 0910—2396

野鳥だより

—北海道—

第 107 号

編集・発行　北海道野鳥愛護会

発行年月日　平成 9 年 3 月21日

ツグミ（白化）

1996. 12. 1　北大演習林　　撮影者　田　子　元　樹

〒063　札幌市西区西野 2 条 6 丁目
3 －60－101

もくじ

傷病鳥獣の救護について……永安　芳江……2
ヤブサメあれこれ（2）……川路　則友……5
オートキャンプ場から自然観察路へ……佐竹　正明……9
探鳥会ほうこく……10
探鳥会案内……12
鳥民だより……13

傷病鳥獣の救護について

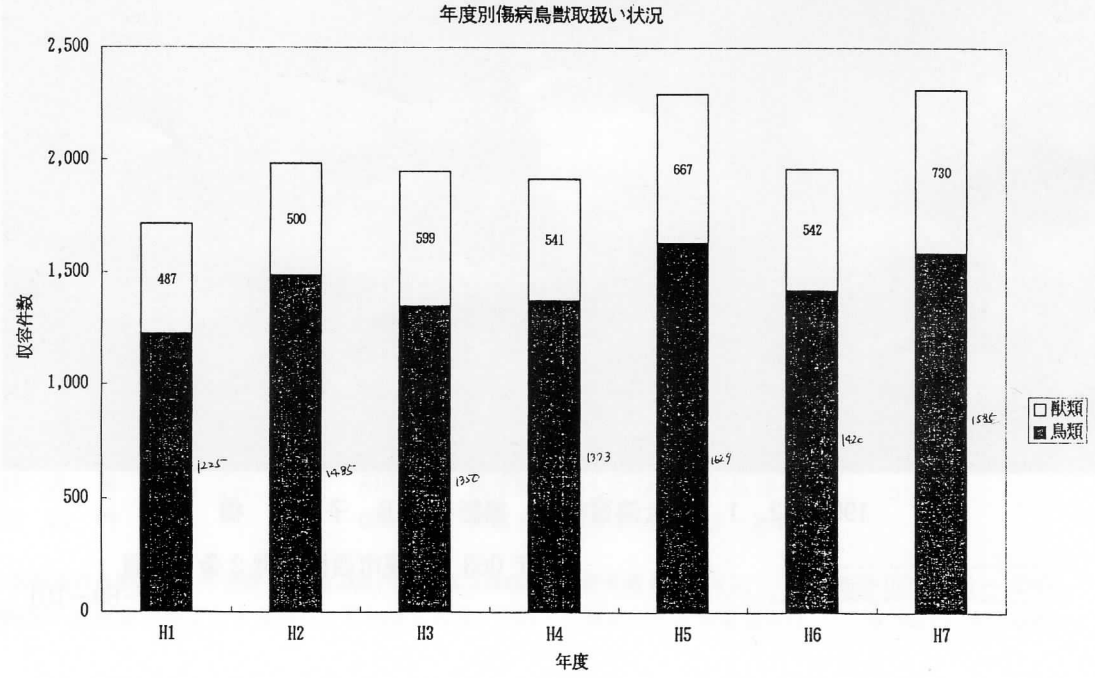
永安芳江（北海道保健環境部環境室自然保護課）

傷病鳥獣というとあまり聞き慣れない人も多いかと思いますが、けがをした野生の鳥や獣のことをこう呼んでいます。

生き物が好きな人は、野外観察などに行った際に一度や二度はけがをした小鳥などに出会ったことがあるかと思いますが、そんなときあなたならどうしますか？

これまでに、いろいろな人たちが見るに見かねて世話をしてきていますが、実は都道府県でもこれらの傷病鳥獣の扱いについては、いろいろと試行錯誤を重ねてきています。拾われた小鳥達を保護するための施設を作った県、公立動物園や獣医さん達に協力してもらい治療を行っている県、などそれぞれの地域の実状などによって、それぞれの方法で傷病鳥獣のもつ問題と取り組んできました。

北海道でもけがをして道の機関に持ち込まれる傷病鳥獣は多く、図1のとおり年によって変動はあるものの平成元年からみると、年間に2,000個体ほどの鳥や獣が運び込まれています。これまでは、道の出先機関である支庁の担当職員や鳥獣保護員さんのほか、民間の施設や団体、個人などボランティアで面倒を見てくれる人たちの力を借りている状況でした。しかし、これまでのやり方では、救護するまでに時間がかかってしまったり、適切な治療ができなかったりして死んでしまったりする動物が少なくありませんでした。そこで、より北海道に適した、効率的な救護の方法として、傷病鳥獣の新しい救護ネットワークシステムを考えてきました。このネットワークシステムは、地域の獣医師やボランティアの方々、動物園などの協力を得て構成し、まず地域の獣医師による応急治療を行うとともに、重傷なもの、長期に治療を要するもの、あるいは希少種の鳥獣に該当し特別な保護が



必要なものなどを個別に判断し、それぞれ対応する施設等へ振り分けることで、効果的な保護収容体制を確立しようとするもので、平成９年度から稼働させようとしているところです。傷病鳥獣の救護ネットワークシステムはやっとスタート地点にたどり着いたばかりですが、今後も皆で知恵を絞り、努力をし、いろいろな人達の協力で問題を乗り越え、動物たちにとってよりよいシステムを作りたいと考えています。

ところで、傷病鳥獣の取り扱いにはいくつか考えなければいけないことがあります。まず第１に人間と野生鳥獣とのつき合い方です。野生の鳥獣にとっては人間に触られること、それだけで十分にストレスになり、弱いものや、弱っているものはそれだけで死んでしまうこともあります。たとえそのストレスに慣れ、人になついたとしても、最後まできちんと面倒がみれるものでしょうか？ペットとして飼われている動物たちは、ずっと昔から人間と生活をともにし、人間の生活の中に徐々にとけ込んできたものたちがほとんどです（最近では珍しいペットとして野生に近いものもいるようですが）。生態も、どんな病気になるのかも、よくわかっていない動物を無理矢理手元に置いていても（つきあい方も難しいでしょうし、）病気になったときにどうしたら良いのかもわからないことが多いのではないでしょうか。私は、野生の動物とはそれなりの距離を持ったつきあい方が必要だと思っています。そしてまた、野生の動物は野生の中で暮らしていくのが一番幸せだと思っています。野生の中での暮らしというのは、私たちが想像している以上に厳しく、常に死と隣り合わせの毎日なのでしょうが、それでも彼らはそんな自然の中でたくましく、誇りを持って生きているように見えます。

しかし傷病鳥獣として運び込まれてくる鳥や獣たちは、死んでしまうものも多いのですが（人間に触られることになれていない。普段なら人間から逃げようとする生き物たちが人間の手に捕まるのですから、重傷なものが多いのでしょう。）、死なないけれど、野生に戻ることができなくなってしまうものたちもまた多いのです。

これらの二度と野生に戻れない動物たちへの対処方法が、これからの傷病鳥獣の問題を考えていくときに大きな分かれ道になっていると思います。

第２には、親切な気持ちで保護した動物が、実はよけいなお世話になっている場合があることです。保護される動物のひなや幼獣たちは、動物の側から見れば、誘拐されてきてしまったと同じような場合が多いのです。親にはぐれてしまった子供だと思い、かわいそうだと連れてきたひなや幼獣の多くは、実は親が近くにいることが多いのです。例えばシカなどは、親と一緒にいると、親の匂いで居場所が分かってしまい、天敵からねらわれることもあるため、これをさけるために、子鹿から少し離れた場所にいて、乳を与えるときだけそばに行くようにしています。このために親がいないように見えてしまったり、また巣から落ちたひなでも、すぐに巣に戻してやれば親がちゃんと面倒を見たのでしょうが、巣に戻すことを考えずにつれてきてしまい、親鳥ほどこまめに面倒を見ることは難しいため、結果としてちゃんと育てられなかったりすることもあります。私たちが相手のためによかれと思ってしたことが、残念ながら相手のためになっていないこともあるのです。それはきっと私たちが相手のことをよくわかっていないからなのでしょう。もっともっと彼らのことを知ることが大切だと思います。できれば人間が彼らの言葉を理解し、直接苦情を聞くことができたらいいのでしょうね。

話は変わりますが、つい先日ロシア船籍タンカーのナホトカ号が島根県沖で沈没し重油が流出した事故があり、多数の海鳥達が被害にあいました。被害にあった鳥たちの数は、海岸までたどりつくことができずに死んでしまったものたちや、人目に付かない崖下などで死んでいるものたちなどもいることから、実際にどれ位の数の鳥たちが被害にあったのかはわかりようがありませんが、保護された鳥たちの数は死亡したものを含めて2,000羽を超えていました。その数が最も多かった石川県では、多い日には60羽を超える生きた海鳥たちが運び込まれ、羽に付着した油を洗い落としたり、介護したりと、目の回るような忙しさだったようです。今回は、石川・福井両県から放鳥できるまでに回復した鳥たちが、北海道に運ばれて来ましたが、残念ながら、北海道にやってきたすべての鳥たちが海に帰れたわけではありませんでした。保護した鳥たちを送り出してきた県では、元気を回復しているものを、しかもプールで浮かべてみて、沈まないことを確認しているものだけを送り出してきているのですが、それでも野生の鳥たちにとっては、初めて人の手に触れられたことや、飛行機に乗せられたことなどが、ストレスになってもいるのでしょうし、一見油がきれいに落ちているように見えても、ほんのわずかでも残っていると、その場所からじわじわと水がしみこみ、結果としておぼれてしまったり、おぼれないまでも、しみこんできた水のために体が冷えて死んでしまうこともあるとのことです。北海道に送られてきた鳥達で直ちに放鳥できないものは、引き受け先の日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリや、野生動物救護獣医師協会、北海道野生動物救護研究会、北海道獣医師会、ボランティアなどの協力のもと、再度北海道で治療を受けることになったのですが、その治療の最中に死んでいくものも少なくありませんでした。重油の流出によって大量の海鳥たちが打撃を受け、一日に何十羽という鳥たちの看護をするような

事態など皆経験もなく、十分な設備もない中で、それぞれができる限りのことをしていました。でも、時が過ぎ、とりあえず救護の山場を過ぎてみると、「もし……であったらもっと多くの海鳥たちを救えたかもしれない。(例えば十分な設備があれば、といったようなことです。)」という気持ちがわいてくるようです。実際、救護に当たった人の話では、保護されてからの最初の一週間の対応でその後の回復が違うとのことでした。

人間でもそうでしょうが、怪我や病気をしたとき、やはり最初の治療が良ければ悪化しなくてすんだり、直りが早かったりしますから、人より体力の弱い鳥などでは最初の治療がもっと重要になってくるのでしょう。今回のような大規模な事故の時には、都道府県の間で協力してより多くの動物たちを助けられるように今後も努力していくことが必要でしょうが、普段の時でも、適切な処置をできる限り迅速に行えるようにすることで、できるだけ多くの動物たちを助けられるような体制づくりや、傷病鳥獣の保護に対する考え方や価値観をできるだけ同一にし、関係者が一致団結してこれらのことに対処していけるよう努力していくことがこれからの課題だと思います。

平成7年度傷病鳥獣保護収容件数（種類別内訳）

鳥類				獣類			
番号	種類	件数	%	番号	種類	件数	%
1	ドバト	143	9.0	1	エゾシカ	548	75.1
2	トビ	104	6.6	2	キタキツネ	88	12.1
3	マガモ	63	4.0	3	タヌキ	27	3.7
4	カラス	61	3.8	4	エゾリス	14	1.9
5	ハクチョウ	55	3.5	5	アライグマ	13	1.8
6	キレンジャク	55	3.5	6	コウモリ類	10	1.4
7	スズメ	50	3.2	7	エゾユキウサギ	6	0.8
8	アオサギ	42	2.6	8	エゾモモンガ	5	0.7
9	カルガモ	41	2.6	9	シマリス	4	0.5
10	フクロウ	36	2.3	10	ヒグマ	3	0.4
11	オオセグロカモメ	31	2.0		その他	12	1.6
12	コノハズク	28	1.8				
13	センダイムシクイ	27	1.7				
14	ヒヨドリ	26	1.6				
15	アカゲラ	26	1.6				
16	カワラヒワ	23	1.5				
17	ハクセキレイ	23	1.5				
18	シメ	21	1.3				
19	キジバト	20	1.3				
20	ツグミ	20	1.3				
21	ムクドリ	20	1.3				
	その他	670	42.3				
計		1,585	100.0			730	100.0

ヤブサメのあれこれ(2)

農林省森林総合研究所　川　路　則　友

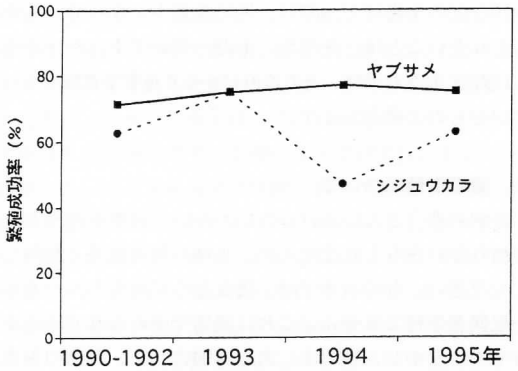
さて、前回はヤブサメの繁殖生活についてながながと述べてきましたが、一般的な繁殖については、だいたいご理解いただけたと思います。今回、ふたたび機会をいただいたので、これまでのものに若干つけ加えることとして、3つのことをお話します。

1．繁殖成功について

せっかく長い距離を旅して、羊ケ丘まで渡って来るのですから、作った巣はすべて成功させて、無事すべてのヒナを巣立たせてやりたいのが人情です。しかし、そこは生物界の掟が示すとおり、そうそう順風満帆というわけにはいかないようです。なかには、せっかく育てたヒナを一瞬のうちに敵にやられることだってあります。そこで、羊ケ丘のヤブサメにとって一番の敵は何なのか、またどれくらいの割合で繁殖は失敗しているのかについて見てみます。

山田良造氏　撮影提供

これまで私が観察した巣のうち、成功（無事巣立ちまでこぎつけることができた）した巣は全体の75%でした。あとの22%は捕食者にやられ、3%は傑作ながら、巣の真下からチシマザサのタケノコがニョキニョキと生えてきて巣を壊してしまい、卵がこぼれ落ちてしまうという「事故」で放棄されたものでした。これらのことから、羊ケ丘では約2割の巣しか敵にやられていないということになります。これは鳥の繁殖成功率としてはかなり高い部類と言えます。ちなみに、本州の長野県で同じくヤブサメの観察を続けている大原　均氏の話を聞くと、かの地のヤブサメの巣は半分以上やられているということです。また、羊ケ丘ではヤブサメとは別に、巣箱を50個設置して、その中で繁殖するシジュウカラの繁殖成功率も見ていますが、それによると約3割の巣が捕食者にやられ、1割が原因不明により放棄しています。羊ケ丘のヤブサメのデータは、樹洞営巣性鳥類の繁殖成功率が樹上性や地上営巣性鳥類に比べて高いとこれまで一般的に言われてきた説をくつがえすものです（図1）



このデータは今後も継続してとっていかなければならず、現時点ではっきりと結論づけることは危険なのですが、少なくとも信州よりも羊ケ丘の地上の方が安全であることは確かなようです。この原因はやはり「ササの存在」と思われます。長野県の調査地は、アカマツ林で林床にはそれほど密生した植生は見られないそうです。しかるに当地は、ササが生い茂り、人間も侵入するのがはばかられます（山菜とりのパワーには負けますが）。これが、意外にも、ヤブサメ等の鳥にとってもっとも危険なキツネやネコといった地上歩行性肉食哺乳類の侵入を妨げているのではないかと思われます。同じ肉食哺乳類でもイタチの仲間（イイズナ、イタチ、オコジョ、エゾクロテン）やタヌキはそんな環境をものともしないと思われますが、幸い羊ケ丘には彼らはあまり住んでいないようです。これはフンなどのフィールドサインで確かめたことですが、イイズナを除くと、これまでその存在さえもあやぶましいほどです（最近、西岡水源地にクロテンが生息していることを知りました）。イイズナも個体数の年変動が大きい上に、1頭が広大ななわばり面積を有するので、それほど、鳥類の繁殖には脅威となっていないようです。それでは、一番の捕食者は何かというと、「ヘビ」です。ヘビの仲間は、当たり前のことかもしれませんが、密生したササもあまり苦にしていないようです。羊ケ丘には、アオダイショウ、シマヘビ、ジムグリおよびマムシといった4種のヘビが生息していますが、その中でもっとも目撃例の多いアオダイショウが、ヤブ

サメの最大の天敵となっています。私も苦心して巣作りの段階で探しあて、ビデオカメラをしかけて楽しみに記録をとっていたにもかかわらず、巣立ちまぎわまでいってヘビにやられた巣が2つもあります。ビデオに大きくアオダイショウの姿が映し出されると、本当にがっかりします。しかし、これが本来の姿なのかもしれないと気を取り直して、また別の巣を探しに出かけることになります。

林業を行う上では、ササは天然林の成長阻害要因としてそれこそ天敵のように嫌われ続けてきましたが、ヤブサメなどの小鳥にとっては、逆に救世主となっているかもしれないことは、皮肉なことだと思います。やはりそこに存在するものは、それなりにかなり重要な意味をもっているものと感心します。

2．婚姻形態について

婚姻形態（こんいんけいたい）という言葉を使うと、耳慣れないかもしれませんが、夫婦の間の関係と理解してください。今の日本では、男女ともにもちろん一人しか配偶者を持てません。これは法律で決められているからです。しかし、事のよしあしは別にして、動物の世界には法律はありませんから、種としての（もしくはその個体として）最もよい方法として、結婚の形式を自由に選択することになります。

ヤブサメはこれまでお話ししてきたことからもおわかりのように、典型的な一夫一妻制です。すなわち、一羽のオスと一羽のメスがつがいとなってヒナを育てます。ところが、2年前にとても不思議な巣に遭遇しました。その巣は、メスによる巣材運びの段階で発見したのですが、通常付き添っているはずのオスの姿が見えません。それからもずっと、一羽で巣を作り、卵を産み、抱卵に入りました。そして卵がいよいよフ化しても、それらしきオスの姿は見られず、ヒナへの餌は、メスだけがせっせと運んできます。フ化して2日目の明け方、突然1羽のオスが現れました。彼は、ちょっと巣の中をのぞいただけで、すぐ立ち去りました。彼は、翌日にもほぼ同じ時刻に現れ、やはりすぐいなくなってしまいました。しかし、それから午前中に5～6回現れたときには、口に餌をくわえていたのです。ああ、これがオスなんだ。それにしても妻にこんなに働かせて、なんてやつだ。と思いましたが、なんと、その翌日、もう一羽の別のオスが現れ、今度は巣の近くでさかんにさえずったのです。もし、このオスもこの巣のメスの夫だったら、あのアラブ諸国で知られている「ハーレム」の逆で、複数のオスを一羽のメスがかかえる一妻多夫という形式になります。しかし、もしそうなら、メスだけが餌を運ぶんではなくて、もっとオスたちの積極的な協力が得られていいはずです。もしかすると、このメスの夫は何らかの原因でいなくなってしまい、たった一人で（一羽で）巣を作ったものの、通りかかった別のオスたちが次々にちょっかいを出しているだけかもしれない。そういえば、メスは最初のオスが現れた時に、羽をふるわせて餌をねだる行動をしていました。媚びを売って、あわよくば他人に餌運びを手伝わせるつもりなんでしょうか。いろいろ想像は尽きません。

こういう場合、単なる観察に頼っている生態研究は、決定的な現場を見のがしてしまうと、まったくものが言えなくなってしまいます。そこで、最初に現れたオス（A）と次に現れたオス（B）、それに以前、そのメスが初めて捕まったのとほぼ同じ時期に同じ場所で捕まった個体（C）の3羽と、メス、そしてその巣でフ化したヒナ5羽のそれぞれから、ほんのちょっとだけ血液をいただいて、研究室の同僚や北海道大学の大学院生の協力を得て、血液による親子判定をしてみました。その結果、その巣のヒナたちは、なんと、すべてがAの子供でした。すなわち、私の見ていないところで、そのメスとAは交尾していたことになります。それでは、なぜAは妻にばかり負担を押しつけて、ちっとも餌を運んでこないのでしょう。実は、Aはそこから80メートルほど離れた場所に、独自に別の巣をもっていたのです。そこにはちゃんと別のメスがいて、彼はそちらへせっせと餌を運んでいました。彼が、問題の巣に最初に姿を現した日は、自分のもう一つの巣（本妻の方の巣）からヒナたちが巣立った日でした。まず最初のヒナを飛び立たせて少しゆとりができたのでしょうか。今度はこちらの巣（二号さんの巣）へごきげん伺いに来たというわけです。これは、まさしく一夫多妻の形式です。

これが、ヤブサメで確認された最初の一夫多妻の例となりました。それにしても、母は強しの言葉どおり、その巣のメスは、ほとんど1羽で餌を一生懸命運び、ヒナを抱き、とうとう無事巣立たせてしまいました。あの調子のよい夫はその後もちょいちょい姿を見せたものの、餌をやる回数はほとんど変わらず、あんまり手伝いになっていないようでしたし、ヒナが巣立ってしまうと、まさしくプッツリとメスの前に姿を現さなくなりました。というのも、オスはもう一方の巣から巣立ったヒナを育てるのにかかりっきりで、そこまで手が回らなかったのかもしれませんし、おまけにそちらのほうではメスが新たに巣を作ったので、そのヒナの世話をしなくてはならなくなったからです。結果的には、このオスは1回の繁殖期で3つの巣のヒナを育て上げたことになりました。さらに、このオスはそれまでの3年間、毎年この羊ケ丘に帰ってくる常連でして、このオスが生涯に残した子供の数は、おそらくこれまでで最高になったと思われました。

3．ヘルパーのこと

ヤブサメの繁殖生活の中で、他の日本産の小鳥と顕著に違うことがもう一つあります。それは、とくに育雛期に、本来のオス親とは別の個体が、巣に突然現れ、その巣の近くで本家をさしおいてさかんにさえずったり、ヒナに餌をやったりするという現象が見られることです。これは、今から10年以上前に、信州で観察され、その当時はやった「ヘルパーをもつ繁殖形態（協同繁殖）」として、大原　均、山岸　哲の両氏により報告されました。その後、信州と羊ケ丘でヤブサメの繁殖生態の研究がすすむにつれ、当初の理解とはどうも違うようだという結果が得られてきています。以下にそれらについてお話しします。

信州での４年前までのデータでは、ヤブサメ全体の巣のうち、４分の３（75%）でこの余計な個体の参入が見られることが報告されました。一方、羊ケ丘でも半分近くの巣（48%）で、本当に突然赤の他人の出現が見られています。ただ、この「おじゃま虫個体」は、さかんにさえずることからすべてオスと考えてほぼ間違いないようです。

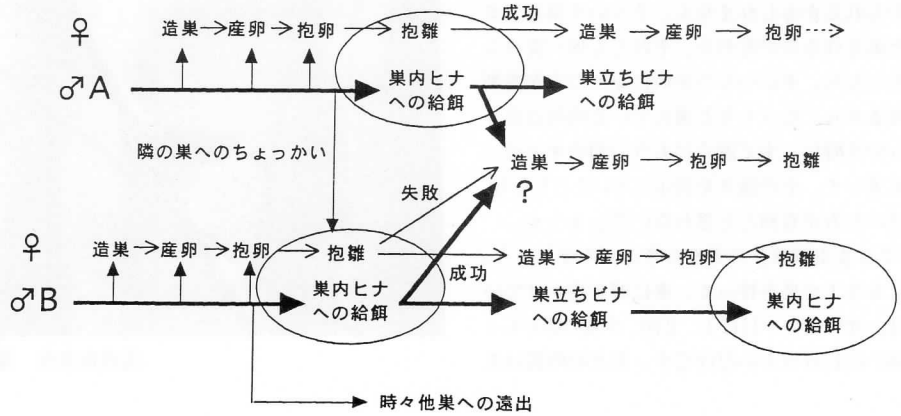
また、信州での観察から、この「おじゃま虫」がその巣のとなりになわばりを構え、ちゃんと自分の巣を別に持っているオスである例が見つかったこと、さらにおじゃまする時期は自分の巣が抱卵中で、自分のつがい相手が巣にすわりっぱなしの時だけであったということが報告されました。すると、翌年には、羊ケ丘でもまったくそっくりの現象が見られました。すなわち、ヒナに給餌中のとある巣で、突然別のオスが現れて、さかんにさえずりましたが、そのオスはすでにカラーリングを付けていた個体で、自分の本来の相手であるメスが抱卵中の巣をとなりに持っていたのです。侵入先の巣では、持ち主のオスは、「おじゃま虫」にはいたって無関心で、一心不乱にヒナへ餌を運び続けます。それどころか、なんと、ときどき「おじゃま虫」がその巣の本来のオスを攻撃するのが観察されました。一般に、オスがしっかりしたなわばりを持つ鳥類では、そのオスの方が侵入してくる別のオスに対して激しく攻撃するのが常識です。しかるにヤブサメでは、まったく逆のように見えます。

少し話が複雑になってきましたので、これまでのデータをもとに、私が考えているヤブサメの繁殖生活の概要について、図に示してみました（図２）。まず、この図には２羽のオス（仮にＡとＢとします）とそれぞれつがいになった２羽のメスを考えます。それぞれのつがいが独立した巣を隣りどおしに作り子育てをしますが（原則的には一夫一妻制です）、Ｂオスの巣の方が時期的にやや早く作られたとしましょう。各巣のメスは、それぞれ巣作り、産卵、抱卵と順調に繁殖の仕事をこなしていき、ヒナが無事生まれると巣の中でヒナを抱きます（抱雛）。ところが、Ｂオスの巣では、すでに育雛中でも、Ａオスの巣はまだ抱卵中です。抱卵はメスだけで行いますので、時間のたっぷりあるＡオスは隣のＢオスの巣をときどき訪問するのです。これがＢオスにとっては「おじゃま虫」になります。さて、そうしている間に、Ａオスの巣でも無事ヒナが生まれ、彼は隣の巣にちょっかいをかけるような時間はなくなります。育ち盛りの子供たちを、ほとんど一人（一羽）で育てることになるからです。そのうちＢオスの巣では、無事ヒナが巣立ち、今度はヒナの世話をＢオスにまかせたまま、メスがまた次の巣を作り始めます。傍らには、しっかりＢオスが付き添うことから、その２回目のヒナも当然Ｂオスの子供であることが予想されます。

しかし、これは一回目の繁殖が成功した場合で、もしＢオスの巣が育雛中に失敗した場合、このメスが２回目の巣を作るとすると、また同じＢオスをつがい相手として選ぶのか、ついさっきまで近くへ寄ってきていたＡオスを選ぶのかがメスの選択にかかっていると思われるのです。ここでは、この結論がはっきりしないので、疑問符で示しました。

さて、それではなぜヤブサメでこのように不思議な行動を示すようになったんでしょうか。もしくはつがいが

（図２）



「おじゃま虫」をなぜ容認するようになったんでしょうか。これを説明するのは至難の業です。まず、それぞれの立場になって考えてみましょう。

最初に、つがいオスの立場です。通常メスは、つがい形成期、巣作り期および産卵期に交尾すると、もっとも受精の可能性が高いと考えられています。そこで、その時期には、つがいオスは必死になってメスに付き添い、他のオスから交尾をしかけられないように守っています。特に貞操観念の強いメスであれば、オスも心配しないのでしょうが、最近の生物学では、より優秀なオスと交尾をして子孫を残すことが、メスの最良の生き方であることが一般に主張されていますので、メスとしては、いつまでも「うだつのあがらない」オスに付いているよりも、積極的に貞操を奪いに来るような強いオスを心の底では望んでいるのかも知れません。それが証拠に、ヤブサメのオスもこの期間はしっかりメスをガードしているということは、逆に言うと、それだけ他のオスがちょっかいをかけているということでしょう。ところが、抱卵、育雛期にはいくら交尾をしても、受精の可能性はかなり低くなります。精子は、鳥類ではある程度の期間、メスの体内に貯蔵されますが、いざ2回目の巣作りが始まり、排卵が行われても、産卵の直前に交尾した精子の方が、受精しやすいからです。つまり、ヤブサメの育雛期では、他のオスがいかにちょっかいをかけても、受精に至る心配はないとつがいオスは考えているのでしょう。さらにその期間は、メスの方もまったくその気はなさそうです。それより無益な争いでエネルギーを消耗させてしまうくらいなら、身近な自分のヒナに餌をたっぷり与えて早く無事に巣立たせる方が、オスにとっては当面有利であると思われます。それを裏付ける観察があります。すなわち、ヒナが巣立つとすぐ、今度はつがいオスが活発にさえずりだしたのです。これは、自分のなわばりを、あらためて高らかに宣言し、メスをガードし始めたものと思われます。

次に、メスの立場から考えてみますと、つがいオスがいつまでも元気でいるとは限りません。また突然、ヒナたちが敵にやられるかもしれません。そういう場合、また同じオスと巣を作るのが有利か、それとも他に優秀なオスがいるとしたら、そいつとつがいになった方が有利なのかも知れません。じっくりと選んでいる時間はありません。そういう時に、すぐ近くにもう一羽のオスが、元気よくさえずって、その強さを誇示していたとしたら、そちらへなびいた方が有利だと思わないでしょうか。

では、「おじゃま虫個体」の方から考えてみましょう。自分はすでにもう1つ巣を持って、妻に卵を抱かせています。自分は、せいぜい一日に1、2回、少量の餌をもってごきげん伺いに行けばよいだけです。あとの時間はまるまる自由に使えます。そんな時、隣りに今まさに子育て中のカップルがいます。そうすると、あわよくばその巣のメスと仲良くなって、別に所帯を持ちたいなと思うのが人情（？）なのかも知れません（あくまでもヤブサメのオスの立場に立つと仮定してです）。もちろん、そのメスに対しては独身貴族をよそおうことでしょう。うまくいけば、自分の巣のヒナ以外にも、別の巣に子孫を残せるかもしれないチャンスです。逃さない手はありません。

このようにして、3者3様、いろいろな事情（思惑）のもとに、この情景が成り立っているものと思われるわけです。この仮説が、当たっているかどうかは、まだいまのところわかりません。実際、この「おじゃま虫」の行動が、ヤブサメの社会で今まで続いているところを見ると、浮気の成功率がある程度高いのではないかという想像が容易につきます。しかし、前にも述べましたが、その浮気の現場をヤブサメで目撃することは至難の技です。そこで、もう1つの方法として、浮気の結果として生まれるヒナにどれだけ違う父親の子が混じっているかを確かめれればよいわけです。これには、多数のヒナなどからの血液の採集、さらにそれを分析する高度な技術の必要性と、私にとってまだいろいろ困難な問題が多く残っています。現在では、ここまでしか言えませんが、今後の研究で、もう少し明らかになってくるものと期待しています。

おわりに

最後は、比較的むつかしい、もしくは俗っぽい話に終始してしまいましたが、ヤブサメの生活には、こんなに面白い面があり、まだまだ解明されていない部分がたくさんあるということがご理解いただけたと思います。まだまだ、書き足りない部分が数多くありますが、また十分研究が進んだ上で、この続きを書かせてもらおうと思っています。

〒305　茨城県稲敷郡茎崎町松の里1

山田良造氏　撮影提供

オートキャンプ場から自然観察路へ

十勝太平洋岸の自然を考える会（セキレイ会）

佐竹正明

十勝地方の海岸沿いに生花苗沼（オイカマナイタマ）があり、タンチョウの繁殖地であり、秋にはヒシクイが渡来します。

大樹町が林業構造改善事業の補助金でここにオートキャンプ場をつくる計画をもっていましたが、南十勝の自然愛好団体がこれに反対し、運動をしていました。

このことが新聞に報道されたこともあり、大樹町はオートキャンプ場計画を白紙にもどし、自然観察施設をつくる方向で検討を進めることになったようです。

その経過をセキレイ会の代表である佐竹さんに原稿を書いていただきました。

会員・帯広畜産大学教授　藤巻裕蔵

セキレイ会は、1996年の6月に発足した浦幌、豊頃、大樹、忠類、広尾の5町村の住民が集まった団体です。野鳥観察者だけでなく、昆虫・植物愛好家、釣り人、山菜採り、キャンプ・登山愛好家、ハンター等多彩な人々で構成されています。会員数は現在のところ、5町村住民以外の通信会員を含め35名です。

本会は当初、自然観察等を行い、地元の自然をもっと知ろうということから始まったのですが、いろいろ準備していくなかで、生花苗沼にオートキャンプ場、マウンテンバイクコース等の計画があることを知りました。

この計画予定地周辺は、タンチョウをはじめ、種々の野鳥の生息地でもあり、また多数の渡り鳥の飛来地でもあり、道東でも数少ない干潟を形成する沼でもあります。

「セキレイ会」としても、安易で無意味な開発に反対する立場から、また自分たちのフィールドを守ろうということで、町に対して計画の中止を要請することになりました。

もともと担当者も理解があって、住民運動も早かったので、「声」を聞く方向に進んでくれ、正式に中止ということになりました。

しかし、すでに林道の舗装工事が終了してしまっているということと、工事内容を見直しても工事そのものは中止できないということから、次善の案として町側から自然観察路と施設を作りたいという提案がありました。

「セキレイ会」としては、どんな形であれ自然のなかに人工物を持ち込むのは良くないという考えを示したうえで、この提案を評価してより良いものを作ろうと考え、この計画に積極的に協力することになりました。

従来、施設というとまずそこにあるものを全部更地（サラチ）にして、その上に建設するという形態がほとんどです。また、とにかく立派な目立つ施設を作らないといけないという考えが、どの自治体でも普通になっています。

設計を担当するコンサルタント会社も、町側職員の受けがいいようなものを提示してきます。そういったなかで目立たない簡素な施設を、周辺との調和に配慮しながら作るという、今までとは正反対の考えで作らせるというのは非常に困難なことかも知れません。

しかし、このままではいくら自然観察施設とはいえ、とんでもないものが出来てしまうという危機感があります。行政や設計者に対して、なんとか理解してもらって、より良いものになるよう提案していきたいと思います。

今回の一連の「セキレイ会」の要望等の成果は、マスコミ各社による適切な報道によるところが非常に大きいと思います。また、十勝をはじめ各地で活動している自然保護団体や研究機関の有形無形のバックアップも大きいと思います。会員以外の一般住民の方々からの声も多数寄せられました。いろいろな動きが町を動かしたのだろうと思います。

とにかく、この運動に初めて当事者として関わってみて驚いたのは、行政の開発に対する意識のあまりにも古いこと、また地方自治といいながら、補助金による事業によって、がんじがらめになっている自治体の自立度の低さでした。また、住民参加の間口があまりにも狭いということでした。恐らく日本中こういうことなのでしょう。大樹町の例はごく希な例だと思います。

補助金による地域経済の確立というまやかしの地方活性化と、目先の経済効果に惑わされた開発などで、これからも私たちの周りの自然がどんどんなくなっていくことでしょう。少しでも声を出して行くことが、自然を遊び場にしている私たちの役目かと思います。

行政や自然愛好家や一般住民が、敵対、対立せずに同じテーブルについて、子孫にこの貴重な自然を残せるように協力しあえるようになればと心の底から思います。

自然保護か、地域の活性化かというような二者択一的な論議に終始しがちな、また、そういう視点でしかとらえようとしない（意図的に？）種々の問題が多すぎます。

野鳥にかぎらず、魚や植物等の自然や環境は、地域経済効果だけでは、はかることのできないもっと大きな問題だと思います。

ご意見、ご要望等ありましたらぜひお寄せください。

小樽港探鳥会

8.12.8
竹内悦子

恒例の北海道野鳥愛護会との共催探鳥会への参加は、今回が3度目でした。思えば、初めて参加した時は、まともに双眼鏡を使いこなす事も出来ずに散々な思いをして家路についたものでしたが、あれから2年が過ぎ、ウミスズメやウミウを識別出来るようになったのですから、続けていれば何事もそれなりに進歩をするという事でしょうか。

小樽駅前には、「こだま交通」の中型バスが3台並び、参加者の多いのに驚きましたが、その内の2台は愛護会の方々との事、皆さんの熱心さに感心致しました。天候はあいにくの雪模様でしたが、風が殆ど無く最初の探鳥場所である日和山へ着いたときには雪も止み、ウミスズメ、オオハム、アビなど、沢山の海鳥達に出会えました。対岸の岩の上にアザラシが気持ち良さそうに寝そべっている姿を見て、太めの自分の寝姿に重ね合わせたのは、私だけだったでしょうか？

祝津の砂浜は、いつも網にかかって捨てられた海鳥達の死骸に、カモメ類が群らがっている場所なのですが、少し離れた岸辺で、一羽のシロカモメが盛んに食事をしている姿がありました。メニューはウミガラスの様でありましたが、これもたぶん、網にかかったものなのでしょう。

今年の2月に見た、むごたらしい情況を思い出しました。

そんな気持ちを振り払うようにして北浜岸壁へ向かいました。コオリガモが気忙しく潜水を繰り返しています。美しい姿をゆっくりと見ていたいのに、フィールドスコープに入れた途端に水の中へ消えてしまい、思わず、「アラー、まただめだわ」と声が出てしまいます。けれど水の中へ消えるときの羽のゆらぎが何とも言えず素敵に見えるのでした。この場所では毎年、ホオジロガモを沢山見る事も出来ます。製粉会社に群がるドバトを狙って、ハヤブサが飛び交う事もしばしばあります。

去年から、昼食をフェリーターミナルでとる様になり、冷え切った体には天国のように映る建物です。こんな時は誰に感謝をすれば良いのでしょう。食事を終え、一息ついてから最後の貯木場へ行き、スズガモを観察しましたが、数はあまり多くありませんでした。

冬の海鳥は、白黒のコントラストのものがほとんどで、面白みを少しづつ探し出せるようになってきたのは、ごく最近の事です。極寒の海で一生懸命に生きている鳥達の姿を見ていると、命の大切さ、自然の大切さをいつも感じるのです。

〒048－26　小樽市オタモイ1－16－4

［記録された鳥］　アビ、オオハム、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、ハヤブサ、コガモ、スズガモ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、ミツユビカモメ、ウミガラス、ケイマフリ、マダラウミスズメ、ウミスズメ、コゲラ、ハクセキレイ、シジュウカラ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト　以上34種

［参加者］青江　正、秋田和子、石橋和子、板田孝弘、伊藤恭子、伊藤聖子、犬飼　弘、井上公雄、上田邦彦・寛子、恵花初子、大森アヤ子、岡田　実・江里、小須田秀子、小野木弘司・幸子、柏葉　明、片山　実・慶子、加藤花子、北山政人、木村与吉、栗林宏三、小堀煌治、佐藤ひろみ、佐藤幸典、白澤昌彦、志田博明・政子、須田　節、清水朋子、高木高敏、高栗　勇、武沢和義・佐知子、田中志司子、太丸リツ、辻　正一、道場　優・信子、戸津高保・以知子、中正憲佶・弘子、成沢里美、羽田恭子、広木朋子、幅崎知椰子、牧野洋子、松本美智子、三浦美重子、村田静穂、森田新一郎、森　茂太・純子・林太郎、柳沢信雄・千代子、山崎カツエ、山田良造　以上61名

［担当幹事］白澤昌彦、佐藤ひろみ

［小樽支部参加者］雨谷美千子、荒井信雄・美和子、石井利幸、石井博子、伊藤清次、猪股栄子、岩瀬操、内山和子、梅木賢俊、梅木賢俊、梅木允子、大川季子、岡本誠人、大久保和子、菊池坦、清田吉晴、栗木君江、児玉キミ、齋藤正彦、坂口信子、佐渡イヨ、佐藤とき子、末岡睦、園田美根子、竹内悦子、田中喜重、中野由美子、奈良田清光、根布谷耕一、畠山一雄、平田弘子、松浦重夫、松山佳則、南谷由紀子、村井富美子、渡邊智子、志賀英子、橋本大次郎　以上38名

［担当幹事］梅木賢俊、齋藤正彦

ハジロカイツブリ

藤の沢・白鳥園にて

9．1．19　佐々木　裕

仕事や用事でなかなか参加できない探鳥会ですが、昨年に続き今年も白鳥園での北海道野鳥愛護会の新年会に参加することができました。

集合時間に15分程遅れて白鳥園に入ると、皆さん「ミヤマホオジロ」などと言っている。「ミヤマホオジロ？」姿のイメージが頭に浮かばない……。私はまだ見たことがないのです。見逃しては一大事と双眼鏡を取り出すが温度差で双眼鏡は曇って見えない！　「どうしょう！」と思う間もなくどこかへ行ってしまったよう。「残念！」と思いながらもしばらく見ていると、来た、来たっ！2羽、3羽。これがミヤマホオジロ……。

白鳥園の野鳥たちの食卓にはごちそうがいっぱい。いろいろな鳥がやって来ます。

私の家の庭にはヒマワリの種しかありません。豚の脂を置いてみましたが、たちまちカラスに全部食べられてしまい、どうしょうかとお正月の休みの間考えた結果、餅や魚を焼く網が良いのではないかと思い、さっそく初売りの3日に買って来て脂を置いてみました。結果は……粗い目のすきまからまんまとカラスに持って行かれてしまいました。ちっくしょう！おぼえていやがれ！カラスに負けた悔しさに眠れぬ毎日でした。

白鳥園で脂肪エサの入れ物を見て、あっ、これだ！アカゲラやエナガのくちばしが入る適度の大きさの網目のネットでした。近くに座っている誰かが教えて下さいました。

「あれなら○○ホーマで売っているよ。」「色のついたのが良いよ。カラスが警戒するから。」などなどといろいろアドバイスがありました。

白鳥園の豚汁をご馳走になり、帰り道に○○ホーマでネットを買って帰り、早速前述の餅焼きの内側に張りつけ、脂肪を庭の木にくくりつけました。

近くの電線の上ではカラスが私の作業をじっと見守っていてくれました。そて、軍配はどちらに？

［記録された鳥］アカゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ミヤマホオジロ、カワラヒワ、シメ、スズメ、カケス、ハシブトガラス　以上15種

参考：白鳥園近くでツグミ、マヒワ

［参加者］長谷川稔、杉元明日子、菅沼良三、武沢和義・佐知子、大町欽子、太田　清・亮、板田孝弘、森田新一郎、山田良造、鎌田玲子、戸津高保・以知子、久田伸一、後藤義民、真壁スズ子、今泉秀吉、竹中昭雄・悦子、丹羽みきえ、蓮沼悦子、柳沢信雄・千代子、新妻　博・登貴子、坂本直人、佐々木　裕・政子、小山美枝子、岡部誠一・美恵子、犬飼　弘、井上公雄、小堀煌治、大西典子、加賀嘉和・和子、高屋敷柾子、村田静穂、西本みちえ・文、早坂泰夫、石井厚子、野口正男、渡辺吉宗・好子、木村与吉、道川冨美子　以上49名

［担当幹事］小堀煌治、大町欽子、道川冨美子

野幌森林公園探鳥会

9．2．9　浅田晴男

今年は例年よりも積雪量が少なく、雪かき除雪に要する労力が少なくて済み助かっていますが、2月9日は久しぶりに夫婦して朝の雪かきに汗を流しました。それというのも、新聞情報で知った探鳥会に参加しようと、前日の夜に決めたからです。大阪を振り出しに3回目の北海道勤務となり、通算15年を札幌で生活していますが、ほんとうの意味で北海道の自然に接しだしたのは、ここ数年でしょうか。鳥や野草に興味を持っているものの、何となく自己流で中途半端な知識しかないため、探鳥会、自然観察会等に多く参加したいのですが、なかなか時間がとれないと、言い訳の多い生活が続いてしまいます。

集合場所の野幌森林公園大沢口に予定通り到着、幹事の方に名札など頂き準備整う。歩き始める前のご挨拶でクマゲラの名が出て、期待して歩き出した。絶好の天気に恵まれ、長グツで参加した私達夫婦（運動神経がニブくスキーは苦手）も、幹事さんのご配慮でノンビリと歩くことが出来た。私達はまだまだ鳥の声を聞きわける実力がなく、双眼鏡を合わせるのが精一杯なので、幹事さんや参加の皆さんに教えてもらえるのが、ほんとうに有難いと感謝いたしました。久しぶりに出合えたキクイタダキの頭の黄色は、とうとうレンズの中に捕えることが出来なかったのが心残りでしたが、素晴しい一日を過ごさせて頂きました。人は感動することにより心豊かになり若さを保ち、ボケ防止になるとのこと。日常生活の中では、自然に接することから一番多く感動を与えられると、あらためて強く思いました。

野幌森林公園へは車で15分と至近距離に住んでおり今年もより多くの感動を得られるよう、一年間可能な限り、鳥と花との出合いを楽しみに散策したいと思っております。

最後になりましたが、当日お世話して下さった皆様方ほんとうにありがとうございました。またの機会あればぜひよろしく、お願いいたします。

〒004　札幌市厚別区上野幌1条1丁目17～16

［記録された鳥］トビ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、

キバシリ、ハシブトガラス　以上14種
［参加者］浅田晴男・広美、中正憲佶・弘子、戸津高保・以知子、柳沢信雄・千代子、犬飼　弘、村田静穂、鈴木正雄、栗林宏三、富川　徹・優・愛沙・百合香、清水勉、吉田雅子、青木淳二、白澤昌彦、富田寿一、井上公雄　以上22名
［担当幹事］富田寿一、栗林宏三

【宮島沼】
平成９年４月20日（日）
毎年増え続けるマガンの集結は３万羽から４万羽になろうとしています。それ自体素晴らしいことに違いないのですが、一方で沼の汚染、伝染病のおそれ、農作物被害、群れの分散化等様々な問題を真剣に考えなければならない時期にもなって来ています。マガンの将来に思いを馳せた観察を心掛けたいものです。
集合＝午前10時　大富会館前
交通＝中央バス　岩見沢バスターミナル発（月形行き）
　　大富農協前下車徒歩10分

【野幌森林公園】
平成９年５月４日（日）
平成９年５月15日（木・平日）
オオルリ、キビタキ等が姿を見せ、さわやかなアオジの囀り、アカゲラ、ヤマゲラのドラミング、ヒガラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ等の鳴き声も活発で見るのも聞くのも楽しみな時期です。誘いあって野幌へ行ってみましょう。
集合＝午前９時　大沢口駐車場入口
交通＝新さっぽろ駅から夕鉄バス（文京台線）大沢公園入口下車徒歩５分

【千歳川周辺一泊早朝探鳥会】
平成９年５月10－11日（土・日）
支笏湖畔のユースホステルに泊まり早朝４時頃から千歳川流域約３Ｋの林道が探鳥の舞台になります。山野の夏鳥が出揃う絶好の時期でカワセミ、ヤマセミ、キセキレイ、セグロセキレイ、カワガラス等の水辺の鳥、山野性のセンダイムシクイ、オオルリ、キビタキ、コサメビタキ等40種以上が観察される楽しみな会です。
日時＝平成９年５月10日（土）19時から交流会、11日（日）午前４時から探鳥開始、午前中解散予定
場所＝〔支笏湖ユースホステル〕
　　千歳市支笏湖温泉番外地　TEL 0123－25－2311
会費＝4,000円程度　宿泊料（夕食付）朝食持参
集合＝19時支笏湖ユースホステル又はＪＲ千歳駅待合室
　　18時（マイクロバスが迎えに来ます）
申込制＝４月と５月の探鳥会の時、電話の場合は５月５日までに白澤昌彦さん宅へ
TEL 011－563－5158

【鵡川】平成９年５月18日（日）
札幌周辺ではシギ、チドリを見る場所は少なく鵡川の河口海岸へ足を延ばします。北の繁殖地へ向かう途中のキョウジョシギ、チュウシャクシギ、オオソリハシシギ、時にはコサギ、ダイサギ等に出会うこともあります。
集合＝ＪＲ鵡川駅前　９時40分
交通＝札幌駅前バスターミナル８時発浦河行き道南バス
　　鵡川農協前下車徒歩５分

【植苗、ウトナイ湖畔】平成９年６月８日（日）
ウトナイ湖北東に広がる草原は草原性の鳥の良い繁殖地です。北海道を代表するノゴマ、シマアオジの観察がここでの注目、草原のジャズシンガーとも言われるコヨシキリ、オシャレなノビタキ、黒頭巾のオオジュリン等開けた草原は鳥たちの恰好のステージです。
集合＝ＪＲ植苗駅前　午前９時10分
交通＝ＪＲ千歳線札幌駅　７時55分発　苫小牧行、
　　植苗着　８時56分

【東米里】平成９年６月15日（日）
かっての原野の様相は薄れ僅かな空き地がノビタキ、コヨシキリ、モズ、アカモズたちの生活の場になっています。カッコウ、コウライキジが見られる貴重な地域になりつつある。頑張り続ける鳥たちを優しく見守りたいものです。
集合＝東米里小学校正門前　８時30分
交通＝地下鉄菊水駅より市営バス（白７米里線）
　　東米里小学校前下車

【平和の滝夜の探鳥会】平成９年６月28日（土）
渓流沿いに森を縫う登山道を進むと時々渓流の水音にかき消される様にオオルリ、キビタキ、クロツグミの声が聞こえ、やがて目的の開けた台地に着く頃点々と星の輝きも目立ちはじめ、ギィーギィーとかん高い声で鳴きながらヤマシギが飛び、静寂の中からキョキョキョとリズミカルなヨタカに続いて森の中から神秘的なコノハズクの声が流れて来ます。夕暮れの森を歩いて見ませんか。
集合＝平和の滝駐車場　18時30分
交通＝地下鉄琴似駅より市営バス（西42西野平和線）
　　平和の滝入口（終点）下車徒歩約20分

【福移】平成９年７月６日（日）
豊平川が石狩川へ注ぐ合流点下流の河畔林、河川敷地が観察地です。めっきり少なくなったシマアオジがこの河川敷で繁殖が確認され関係者の理解と協力により保護の手が差し延べられる様になりました。近年一部の野鳥を除いて固体数の減少傾向が目立つ中、なんとか歯止めをかける手立てはないものかと考えています。

この地域も数年前大規模な河川敷地改修工事のため、河畔林伐採等で野鳥の生息に危機的な時期もありましたが、自然回復が進み野鳥の楽園になりつつあります。

そうした事柄を踏まえ優しい眼差しで野鳥に接して行きたいと思います。

集合＝市営バス福移入口停留所横　8時40分

交通＝地下鉄東豊線環状通東駅より　市営バス北札苗線福移入口下車

【野幌森林公園を歩きましょう】

平成9年4月6日　5月25日　6月1日　7月13日

集合＝大沢駐車場入口9時

☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。

☆交通機関を利用される方は各自でお確かめ下さい。

☆昼食、雨具、観察用具を御持参下さい。

☆探鳥会の問い合わせは（011－851－6364）柳沢宅へ

鳥民だより

◆総会のご案内

平成8年度の総会を次のとおり開催いたしますのでご参集ください。

日　時：平成9年4月19日（土）14時～

場　所：札幌市市民会館会議室（中央区北1条西1丁目）

議　題：平成8年度事業報告、同会計報告ほか
　　平成9年度事業報告、同予算（案）ほか

なお、総会関連役員会を4月9日（水）18時30分から開きますので、役員各位のご出席をお願いします。

◆平成9年度「野鳥写真展」開催について

平成9年度の写真展を下記により開催いたします。

開催期間：平成9年4月29日～5月15日（3週間）

場　所：カメラの光映堂フォトギャラリー「ウエスト・フォー」
　　札幌市中央区大通西4丁目6番地
　　Tel.（011）261－0101

［作品の応募要領］

・大きさは四ツ切りとしカラー、白黒は問いません。

・応募作品は野鳥の種名、撮影年月日、撮影場所および撮影者氏名を明記してください。

・営巣中の写真などはご遠慮ください。

・締め切り日：平成9年4月20日

・送　付　先：柳澤信雄会長宅
　　〒003　札幌市白石区栄通8丁目3－11
　　Tel（011）851－6364

写真出展者へのお願い

写真展にあわせた作品展示準備のため4月28日午後5時30分ごろから会場でのご協力をお願いします。

実施要領は柳澤会長に直接ご照会ください。

◆平成8年度年会費の納入についてお願い

平成8年度の年会費未納の方は、恐れ入りますが早急にお納めくださるようお願いいたします。

新年講演会とスライド映写会
9．1．11
札幌市女性センター（編集部）

小杉和樹氏（利尻島自然情報センター）による「利尻島の博物誌」と題しての講演会は、利尻山（標高1,721m）を中心に移りかわる利尻の四季と飛来する野鳥、渡りゆく鳥たちと、折りおりに咲く山野の草花などが、美しいスライドと共に紹介された。

野鳥に限って云えば、小杉氏が'60年から'97年1月までに観察記録した鳥種は248種という。

「'87年12月8日、オタトマリ沼でルリガラを初認したことがわたしを一層の鳥キチにした。一度会ったきりのルリガラに再会したい」と云われた。

参加者の大半の方は利尻島を訪れた経験があるが、「利尻の人は天気予報を見るときは温度ではなく、波の高さを一番重視します。波の高さが4mとなれば船は出ません。皆さん、冬の利尻に2～3日泊まって行って下さい。冬の利尻はきっと皆さんを魅了しますから」と。

［スライド発表者］田子元樹、佐藤幸典、石橋孝継、山田良造、新城　久　以上の5氏

［参加者］白澤昌彦、富川徹、渡辺紀久雄、三船喜克・幸子、山田良造、柳澤信雄・千代子、小堀煌治、栗林宏三、田子元樹、森田新一郎、井上公雄、道場優・信子、戸津高保、矢野玲子、新城久、泉勝統、野坂英三、志田博明・政子、樋口孝城・陽子、長谷川稔・貴子、石橋孝継、菅沼良三・郁子、尾田和夫、佐藤ひろみ、太丸リツ、佐藤幸典、石橋礼子、今村三枝子、野口正男、新妻博、竹中昭雄、清水朋子、鈴木大和、沢部勝、韮沢ちよ、萩田満利、菊地恵子、安倍福子、久保美智子、小山内さと子、中嶋慶子、伏島信治、浜田強、広川淳子、内川雄平、温井日出夫・潤子、前田幸宏・節子、齋藤美智子、早川いくこ、溝口恵美、小山美枝子、菊井薫、平賀節子、山崎カツエ、橋爪陽子、菊池聖子、伴野俊夫・美江、広木朋子、鍋城千代子、元谷千鶴子、西窪すい子　以上71名

［総合司会］白澤昌彦

重油流出被害の救護ボランティアに参加して
―佐藤ひろみさんからのお便り―

野生動物救護獣医師協会が先日、海鳥の被害をまとめました。集められた鳥は約1300羽、31種。けれども生きていたのは400羽ほどでしかなく、さらに自然に戻せたのはまだ約80羽に過ぎない。全体ではざっと3万羽が被害を受けた、と推計されている。(編集部)

'97年1月2日に起きたロシア船(タンカー)「ナホトカ号」の沈没事故による重油流出のため、日本海沿岸では多大の被害が出ました。海鳥たちも多くは死体で回収され、瀕死の状態で保護された個体は、石川県などで緊急の手当てを受けた後、回復の見込みのあるものについて、ウトナイ湖サンクチュアリーへ空輸されました。

その後、アメリカの海鳥救護専門家が来日し、汚染鳥の洗浄、ケア、ネットを利用したダンボールのケージ、検査法などの指導を受けました。

マスコミを通じて、ボランティアの募集があり、何人かの愛護会の会員も参加されたので、その感想を聞きました。

会員Aさん　「体力を回復させるための強制給餌を体験しました。糞をかけられ、においが鼻についたけれど、普段スコープで見ていただけのウミスズメは意外と小さく、気になっていたシロエリオオハムの太い首にもふれることができました。

平日のボランティアが少ないので、是非多くの方に呼びかけたい」

会員Bさん　「主婦の立場を利用して、主に平日に参加しました。介護に使用したタオル類の洗濯を担当しましたが、枚数が多く、何回も洗濯機をかけました。

海鳥のため湿度を保たなければならず、なかなか乾かず困りました。なかには寄生虫に感染した個体もおり消毒に気を配りました。

最初は強制給餌中心のエサやりでしたが、その後野鳥を自然に放つべく、大型プールで生き餌を自ら採るようにリハビリー訓練をしていたボランティアの姿が印象的でした。」

会員Cさん　「自分の職業を生かし、海鳥の血糖値、貧血度などを調べる手伝いをしました。

長期間泊まりこみで頑張っている獣医さんやボランティアの方がおられるのには感慨をあらたにしました。」

最初は混とんとしていた救護活動も、後半からはチームを編成し、組織的になったようです。今回の貴重な体験を無駄にすることなく、マニュアルができればよいと思います。

参加された方々に、心から「ご苦労さまでした」と申しあげたい。

会　員　名　簿(追補)

平成9年3月5日現在

[新しく会員になられた方]

池田　みちえ	582－2877	005	札幌市南区真駒内緑町4丁目－1－9－105
村田　静穂	511－8768	064	札幌市中央区南16条西8丁目2－37
村上　トヨ		003	札幌市白石区南郷通り16丁目南2番9号
高橋　浩幸	0123 23－5842	066	千歳市北栄1丁目25－7
高木　高敏	551－5688	064	札幌市中央区伏見2丁目6－35
坂元　直人	737－3070	001	札幌市北区北9条西4丁目エルムビル10Fエコテック

[住所変更等]

板垣　定親		041	函館市桔梗町332－126
稲葉　孝徳		001	札幌市北区北20条西8丁目18
本橋　孝之		006	札幌市手稲区稲穂1条1丁目12－30－805
松井　昌		005	札幌市南区真駒内南町1丁目1－12－307
金子　由美		064	札幌市中央区南12条西11丁目1－30
武井　修一	092 927－1050	818	筑紫野市美しが丘南4丁目12－20
岡田　幹夫		080	帯広市東6条南10地共8－202号

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)　郵便振替 02710―5―18287

〒060　札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階　北海道自然保護協会気付　☎(011)251―5465